ある日の育児日記から

(85)

佐藤　和代

先日、久し振りに会った友人に言われました。「『幼児の教育』読んでるけど、あの失業したダンナはどうなったの？」…はい、家におります。

今のところ、データベース作りの下請けをしたり、ホームページの作成を請け負ったりと、在宅フリーターといったところ。主夫は休業中。

そういう勤務体制（？）のため、近所を昼間歩くことが多くて、それも一年中Tシャツにジーンズ（夏は短パン）なので、「時々うさんくさい目で見られる」と本人は言います。このあいだはたまたま圭の友達が道ばたで泣いているのに出会い、声をかけたのはいいけれど、何となく通り過ぎる人の視線が…。まあ、泣いている女の子と薄汚れた風体のおじさんという組み合わせでは、想像することはひとつ、だったりして。「塾に来たらまだ開いてなかったみたいなんだよ。あとで先生がきてさ、『いや実は娘の友達で』なんて思わず言い訳してしまった」。

でもこれが、有を連れていると、たちまち「子どもと遊んでくれるうらやましいお父さん」という目に変わるらしい。住宅街では、昼間からふらふらしていても、子連れなら市民権があるのね。でも、有が「幼児」でいるのもあと少し。もう少しましな格好で歩いてもらおうかな。

イトコが1人、ふえました。
圭は「うちにもほしい」…うっ